



何陋七部集

何陋

六

5  
4406  
6



門へ 5  
號 4406  
卷 6



荒野集卷之六

雜

年中行夏内十二句

供屠藕白散

荷今

いさひなやとそあやゆる人比身

春日祭

とーるくろくたのなげはは

石清水臨時祭

昭和九年九月二日  
購末



水音のきつゝんかきつゝん

灌佛

まよぬれ日やつゝんはらふ佛

端午

おも袖さく夢付は髪髪

施米

らちめをさけ米そ虫臭

乞巧費

この葉とくま七ク草とさ

駒迎

爪髪も猿のすゝん

撰虫

まの地や豆のお

十月更衣

玉しとみ衣く

五篇

舞姫に來りし指をたづなり

追難

木を縛りて腸よりくもる思ひ面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

氷のしほり流るるはまの風

白片落梅浮浦水

あまのたよりにはけは梅白し

春來無伴閑遊少

花賣よりあつたのあらし隣りし

花下忘帰因羨景

宴入なはものしりせむの下の

留春春不留春歸人

寂寞

いさむもくはるの野もれ

巖風吹袂衣

不寒復不熱

徐脫を松の葉にすくひて

池晚蓮芳謝

蓮のまをひらきて

暑月身家何処有客

來唯贈北窓風

涼をとりて

大座四時心惣苦就中断腸是秋天

坐の縁を結んで

夜來風雨後秋気飒然新

秋の夜を結んで

鐘の響き初夜長

秋の星河欲曙天

残照燈下猶斜光月穴穿牖

残照燈下猶斜光月穴穿牖

霜りもあやほくも白くよまの月

一カ物 秋霜能懐色

白くもやまふれつる心を秋のま

十月 江南天气好

可憐冬景似春羨

こかししとまろく息つく少き

寂寞深村夜残 雪中閑

静かにさ出るとぬむしやききのう

白頭夜礼佛名経

佛名の礼之腰懐く白髪引

福向は権ひのう居はしと

さしつとわたりて

鋸鋸目立

舟泉

かきほしのり月々 くらむしあ

付木突

五月園の鶉をよめる人の歌

鉤瓶縄打

かへるはちやほのこころとあはれに

糊賣

あはれまのこころをわびて

馬糞橙

こがししの松をよめる歌

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚處

かけぬきの抱はきこころ

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覺花

冠不整下堂

ささる風と竹のこころをよめる歌

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛

點眉之細長外人不見之應矣

その姿もあやしくのまの終

西施

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

总なるの極く牡丹の影

王照君

美人

王貌風沙滕畫圖

このまよひをさしぬるの柳分

一目留主をさするの侍

釣雪

卯

疾也の故也は佛供饗火く

辰

杜るまらん繪書紙来るはり

巳

り

七



漢釋乃腹...  
漢釋乃腹...  
漢釋乃腹...  
漢釋乃腹...

午

乃而...  
乃而...  
乃而...  
乃而...

未

蟬乃...  
蟬乃...  
蟬乃...  
蟬乃...

甲

五月...  
五月...  
五月...  
五月...

王...  
王...  
王...  
王...

一...  
一...  
一...  
一...

是...  
是...  
是...  
是...

凶...  
凶...  
凶...  
凶...

廉...  
廉...  
廉...  
廉...

野...  
野...  
野...  
野...

野...  
野...  
野...  
野...

星...  
星...  
星...  
星...

枝...  
枝...  
枝...  
枝...

海魚

おぬしを鯛引きと金魚の月 全

川魚

秋の昏鴨川くの火ぬきと 合帖

牛馬置是謂天落馬首穿年

鼻是謂人

一方を極はく極は継本より部 越人

藏舟於壑藏凶於澤謂之

固然而夜半有々刀者負

之而走

かゝるゝ原走の市にらるゝとい

絶聖棄衆知大盗乃止

セクシキウツクシキウツクシキウツク

鏡者久

其ぬらゝゝ路をさすものもたつた 桂夕



曠野集卷之七

名所

さきさきすみ奥さき見ふ竜回水	杜園
——奥さ骨や或う大江山	荷今
かゝ橋乃松とせとく脚さく	芭蕉
昔第一把うさくせとく何波さく	湍水
嵯峨はくくちとくあゆむせ	荷今

琵琶橋眺望



野の原をゆくるる心ゆくも物思ひ 胡及  
 野の原をゆくるる心ゆくも物思ひ 例支  
 武を死にやいふ事しとて雨 舟泉  
 湖を舟にゆくとん村に死 尚白  
 か〜橋やとあるとあるゆゆ 随友  
 むご〜の也ねあへとあみの母 俊思  
 せ〜しと生海氣を橋や水の 奥 俊似  
 み〜の指輪 穂也との〜 一矢  
津島

雪が富士を白く川に流るる 湍水  
 〜〜〜唯大雪が夕小 野水  
 星崎のや〜や〜や〜 芭蕉  
 夢の舟や不破の小舟 如行  
 旅  
 宙を崖とく上くや〜や〜 芭蕉  
大和国平尾村より  
 花の隈隈は如くも旅の如く 全

揚嘆里を脱くく海をたり 夕帆  
日の入や舟をえくは樵の也 一髪  
のさくもや添の音おせさうな 荷兮  
半川脱く後におひぬ衣へく 芭蕉

あまの候別

柳をくくはあまの候をく 除凡  
疾くくぬく食糧のゆるゆ 冬松  
散をくくすくはあまの候 昌碧

五月雨や柱月をおす市松家 松芳  
夕をくくはあまの候をく 傘下

芭蕉の候別

稲妻あはくはあまの候をく 釣雪  
なまの候をくはあまの候 一井  
あまの候をくはあまの候 野水  
おひくはあまの候をく 舟泉  
あまの候をくはあまの候 嵐彈

あししなほりんていひるへ

文級乃月ちこ二人ころろけり 荷今

越人秘とていしやとあはれ

月入り脇をつきく馬乃うへ 野水

たぐり河川たがりつとを本勇み 芭蕉

知乃昌あはれは散り秋のり糸 路通

将恐桶とあお其南れとあひま

将恐桶に麻をかつきく秋の山 荷今

こぼりく 稲もるとあはれ

入月こころきほしとまわす 去寮

能くまけく観あはれお徳う那 一井

小川あはれ人あはれとあはれ

澤菴乃墓まわりの秋の香 文鱗

草枕あはれとあはれとあはれ 芭蕉

族あはれあはれとあはれとあはれ 常秀

津島

十五



芭蕉のこゝろ

つゝもよみかたはあはれなるこゝろひき 荷今

そよこゝろ 羽織を袖に入ふなり 野水

其角のつゝ

あゝもよみかたはあはれなるこゝろひき 荷今

天竺のこゝろ 越人

こゝろのこゝろ 傘下

里人のこゝろ 宗因

越人のこゝろのこゝろ

こゝろのこゝろ 芭蕉

越人のこゝろ 同

迷懐

此一巻を終る

こゝろのこゝろ 路通

子を獨守つゝ 収宣

余にのこゝろ 落梧

も野のて

あまふたふさぬり奥の院 杜園

あまふたふさぬり奥の院 梅吉

高野のて

只あのをさるるに色 雛子の色 芭蕉

あやふさふさ 荷号

きふ入陽 同

一本のなす 杏雨

肩衣 秋風

何 亀洞

九月十日

かくれあや 嵐雪

あ 暁語

あ 芭蕉

あ 芭蕉

四里の人

二か〜の〜  
杜國

鐘倉建長寺よまよて

〜  
越人

あまの〜

〜

あまの〜  
荷今

ちの〜

〜  
氣彈

櫛の〜  
去來

月也遠〜  
西武

物〜  
芭蕉

は〜  
除風

老〜

〜  
越人

意  
伊勢

〜  
一有妻

まぬくや余のよもを時ちり 除風

蚊屋おしくら風のちりちりちりちり 長虹

むーてり月こもれぬくも 丈淵

虫下にかゆきつるも女う那ー 冬文

きいひめー妹う垣ひらききり 心棘

六宮粉黛奥顔色

平月周の稲妻あつちの影 長虹

一色くも人侍のあつちをどかり那 尚白

まひーまはよ

つまのーあつちやうゆー女あも 尚今

まらあのーあつちあつちまよーあ 小春

妻のあつちあつちーあつちあつち 越人

松の体時争う旅のくちりか 俊似

おおもひ火燵をぬくいさむ 舟泉

うさねくち持はるるあつち 嵐集

山畑ーりものぶらや華う引 松芳

山崎の松 冬松

松崎の松 昌碧

奥常

未期

守武

世津

下傘

未期

七頃

松坂の松

荷今

松坂

去来

松坂

荷今

水月ついでの相あひまのあまならずりと  
野水のら

辞也

あもゆなやみ竹たけ筥ばこ一いつ川がわ二に主ぬしコこ舟ふね

子こここままららゆゆゆゆ

何なにののああををかかくくくく一いつ確まことり  
落悟らくご

一原野いちげの

ななららぬぬやや小こ野のののななららぬぬななららぬぬ  
釣雪つゆ

妻つまのの遊あそ善より



ななららぬぬししささのの里さと人ひとららぬぬののむむ 自悦じげつ

季あき下しもうう妻つま乃のささららぬぬ

ななららぬぬ

ななららぬぬややかかへへひひええゆゆくく山やま出でるる 去来しゆくらい

コこ舟ふね乃のささららぬぬ後ご

その人ひともも断たぎりりぬぬしし林はやしのの池いけ 其角そのかく

ああくくななららぬぬななららぬぬななららぬぬ

三十一

十一

松風子や智かり合らふ秋の香 尚白

ある人の遠善く 其自

埋火をさゆやあまの意をも 芭蕉

旅よてみまかりまあ人の心 去来

あつちをたそへうもくろく子河なり 胤弾

まよひの野くくやと俳の多岐 小春

春の野くくやと俳の多岐 自註

春の野くくやと俳の多岐 自註

曠野集卷之八

釋教

伊勢く

神垣也ねあはるうひに涅槃像 芭蕉

負うまをぬねはしむりねんをう 胤弾

西行上人五百歳志す

たけのこやしむねの梅の肌 荷守

ねのこやしむねの梅の肌

連翹やそゆと月や志月飛りり 胡及

うつく青く降の葉くくは二玉川 松茸

木履くく信りきり雨乃花 松園

片とこゆとふく花のき 冬松

花く酒信やも飽ん揚さこの那 其角

貞享つら此入居の歳派主月東照宮の別當  
僧正の成房に意を思入師近座執事法華  
八講の信に思を思入徳園又まよりとく  
序品のころうか

散るたのころとむくしとむくし 越人

女三房の徳やまを思く四葉半は秋に信りて

あつと龍女成佛のあつかりてまのひあま

白鼻かむきの

ほろくくとあつとあつとあつとあつと 同

親き青は尾まのころくくはまより 俊似

古寺やほろとあつとあつとあつと 一井

八葉のころし

伊豫

あつとあつとあつとあつとあつとあつと 千園

あつとあつとあつとあつとあつとあつと 一井

あつとあつとあつとあつとあつとあつと 莖葉



まのりん

薩佛乃りりん子竹子麻子芭蕉

薩佛のそひ子一子尚白

まのりん

腰のあひ子一子雪

并子一子笑加賀

十如是

松子一子荷子

昂身昂佛

復隈乃子佛子愚益

ほ子一子衣子崩子彈

ね子一子施子荷子兮

お子一子探子丸

石子一子文子里

規子一子向子洞

た子一子ト子枝

1184

松待みよ〜らん松乃松 釣雪

平ホ施一切

松待も〜らん松乃松 後似

松待も〜らん松乃松 荷兮

恒越〜らん松乃松 上枝

あつちの真の〜

あつちの真の〜

あつちの真の〜

乃く〜ぬらん松乃松 荷兮

あつちの真の〜

燕も待まり乃鼓〜らん松乃松 其角

進〜らん松乃松 一井

神の子〜本松乃松 上枝

あつちの真の〜

衣〜らん松乃松 嵐彈

鎌倉の西園倫 寺の〜

た〜らん松乃松 越人

古寺の巻

暎や伽藍の雪見也ひ 荷兮

同

雪ややくると一玉より片腕 俊似

了りるるくこハされもさ 雪似 一井

船を渡する人のこハく和舟敷 文同

千觀、馬もかせりしゆのゆ 其角

薬玉品七句

如寒者得火

山白くむやの寝る 胡及

如裸者得衣

雪乃日也 湯桶 指ふあまが家

如商人得主

双六乃あひこよひこむつら

如子得母

竹もくちをけとんつくとけ

如後得船

月影比隣の板本さきなり

如病得醫

かきくさしはあつと付あしき

如晴得燈

秋のよむねしゆきさきくさ

神祇

古もや名あらしの獅子頭 釣雪

二月廿五日を細く

たさしきや廿四日の月影梅 荷今

あしと梅をぬくる庭火分 同

あつとあひてこく神の梅 亀洞

上下のさしぬやうく神の梅 昌碧

灯のかすのなかり梅の中 釣雪

何れもこれのやうなまじり梅のむ 越人

是くもくあつ南とさつる梅の舟泉

月代も志もるちりや梅の雨桐

門あつて梅も瑞籬たふりり 重五

繪馬も信人の後まさとめりり 玄茶

是くもまじり齒朶かきとる結可

宮乃後川後もるるさめりり 李桃

此も彼の本も紫の中の好葉

ほろもまじり糸の中を過りり 玄察

まぢり糸針をわくも欠串うな 亀洞

破扇つまらあつす伊後うめ 未学

川系もこの院まも地くく此後や 荷今

こかりしや星珠子覗く神輿初登 尚白

此月能高比須もころよあやうや 松芳

あつと神や称豆のさめりり油筒 落格

若宮奉納

三つとくぬまも妙也神々系 利重

跡の方也ふ候まらすおの跡系 野水

能麻川昔の縁から神系 昌碧

かつとこの神とてふともて庭火が 村俊

橋杭や内枝うも媒とてい 卜枝

祝

肩付らいくらへおめぬき系 冬文

荷字の四十乃もさく

貴まをも竹を修とてゆめ 重五

君の代やとくくとも玉つたに 越人

青苔も何海もよと神仲の石 傘下

いふもいふもたよと枝海の人 亀洞

ふ代の秋にあひとていふも 同

きくかか神おらるる人よるをさ

先程へ杓はらのみとて神上 芭蕉

